誌上行学講習会

高佐日煌上人

第九課、判断識

「意識に於ける両者の在り方を図表すると前頁の如くである。」

覚意識の中味は我、即ち主我であります。主我の中には私情と良心でありますが、私情とは自分に都合の良いように考える心を言い、良心とは道理に叶うように願う心。この二つが主我の中に含まれているわけであります。この二つはしばしば衝突をいたします。

私情と良心とはうらはらでありますから当然かも知れません。「本当は一万円ほしいが相手の心にもなって、やはりがまんしょう」こんな時は私情より良心が勝っている時であります。静かに考えてみればこのようなことは日常誰でもが経験していることであります。その主我は意欲をもっている。意欲とはあゝしたい、こうしたい、つまり心の中からのぞみ、願いを表の方に出すことを言います。普通の欲とは一寸違うようであります。意欲が起ると志向がついてくる。志向とは一つの目的に向うということであります。志が向うところと考えて良いでしょう。その志向に二つの欲望、知欲と楽欲が起ります。

（以下次号）

お題目で成仏する Ⅲ

霊的世界から肉体に入り込んだ意識は、肉体と適合することによって肉体的意識を形成しました。それが地上我です。肉体に入り込んだ意識は、生存欲を根本とした様々な執着を持ち、何度も地上に肉体を持つたびにその欲望と執着を深め、その欲望をとげようとした行為をすることによってカルマという意識の循環的エネルギ体を形成しました。このカルマ欲望の執着によって人は生まれ変わり、輪廻転生をするようになりました。輪廻転生を幾度も繰り返すうちに人は霊的意識を肉体に埋没させてしまい、霊的意識は肉体意識の中で眠ってしまいました。それ故、霊人は神仏の元にあった霊界に帰れなくなったのです。

人類史は生存欲を根底とした、生存競争、すなわち戦争の歴史です。今も世界では、戦火の絶える時はありません。戦争は弱肉強食の動物的本能による行動ですから、いかに人類が肉体の動物的意識、本能に左右されているかが分かります。

この動物的意識に埋没し身動きがとれなくなってしまった魂、輪廻という檻にとらわれてしまった魂を救済する為に釈尊は、その前世から人類の魂の肉界意識からの解放計画を立て実行してきました。

魂の解放は、肉体的意識をコントロールし超越することによってなされます。釈尊は肉体意識の根源的な欲望である生存欲、生殖欲を空として競争意識を無我として超えようとしました。その道は八正道であり、それは正見、正思、正語、正業、正命、正念、正定です。八正道は慈悲心を養い怒りを離れ、足ることを知らぬ欲望を捨て、今ある自分の本当の意識に気がつき、神仏の心である本当の自分に返ることが肝要です。

釈尊はつまり地上的自我から本当の自分を解放する道を説かれたのです。それは、妙法（根源意識）と言う意識に帰る道なのです。このように釈尊の教えは修行によって本当の自分に返る道です。大乗佛教は信仰と慈悲の実践によりそれを成し遂げる道を開いたのです。それが南無妙法蓮華経のお題目に結実されました。